



家族と農業経営

3回
シリーズ

第2回 一家族経営協定は誰のため？

家族経営協定の目的は、とかく「農家の女性のため、家族のため」といわれるけれど、それって本当？ 家族間の取り決めのはずが、協定書に家族以外の第三者のハンコが並ぶのはなぜ？ いったい誰のためのものなの？ まずは「本物の協定書」を見に行った。

三好 かやの

●うちにもあれば…

「家族経営協定？ うちにもあるといいのに。農家はいいなあ……」
というのは、うちのダンナの弁である。

ぬあにい？ わが家は古本屋の夫とフリーライターの私、3歳の娘の3人家族。私が取材で遠出するときは、保育園だけでは間に合わず、10坪ほどの小さな店で古本に埋もれながら父子2人で留守番をしなければならぬ。

月に何度も出張が重なると、ダンナもかなりしんどいらしい。だからといってベビーシッターを雇うのはもったいないし、保育園に預けた上にまた誰かに娘を託すのを嫌がって「オレが見る」と宣言したのは彼の方だ。

「遠出の取材は月3回以内とする」

そんな協定がほしいらしい。うーん。農村では「女性のキャリアアップのために家族協定を」とかいわれているのに、こんな協定を結んだら、私の仕事が減るじゃないか。ぜえーったいいらぬゾ。もしかして「家族経営協定」って、男女に関わらず「虐げられた方」がほしがるとはものなの？ それじゃまるで私が虐待妻みたいじゃないか…。

頭の中だけでこの問題を考えていると、わけがわからなくなる。「本物」を見に出かけよう。

●協定は黄門様の印籠か？

「協定見せてください」

そんな私のあつかましいお願いに、快く応じてくださったのは、以前取材でお世話になったAさん夫妻（40代）である。妻をA子さん、夫をA男さんとしよう。2人は今年に入って、普及センターのすすめで協定を結んだ。早速協定書を拝見と思いきや、「あれ、どこにいったっけ」

バタバタバタ……慌てて母屋へ探しに行くA子さん。協定書は金庫にも額縁にも収まっていられないらしい。しばらく探してやっと出てきたのは、ペラペラとした一枚の紙だった。「経営の役割分担」とか「就業条件」「福利厚生」など、経営にまつわる条項が連なっている。一通り読ませていただいたが、以前からA家を取り組んでいたことを、文書化しただけのように思える。

「協定を結んで、何か変わりましたか？」

「それまでやってきたことを書いただけ。別に変わりはないですよ」

文書の最後には、夫婦2人の実印と農業委員長、農業改良普及センター所長のハンコまで押してある。なんだか仰々しいなあ。さらに「家族経営協定」のモデルケースとして事例集まで配布されていて、

「経営主は妻に対し、次のとおり報酬を支払う 月額10万円」といった文章が、連絡と連なっていたりする。万が一この10万円払えなかつたら、誰かが補填してくれるわけでもない。法的な効力もイマイチのようである。

「妻の報酬1億円って書いておおうか、なんていつてたんですよ（笑）」

さらに協定を結ぶときは「調印式」というのがあって、協定を結んだ人たちは、ホールに集められ、壇上で農業委員長や普及センター所長の前で紹介を受けたりするのだそうだ。まるで学校の卒業式や成人式みたい。大の大人がわざわざみんなの前でお披露目までして結んだ協定だから、さぞかし効力があるのかと思いきや、

「うーん、夫婦喧嘩のときに、黄門様の印籠みたいに、『この協定が目に入らぬか！』って出すぐらいしかないんじゃないかな（笑）（A男さん）」

夫婦喧嘩の切り札といっても、ふだんはどこへいったかわからない状態みたいだし……。A夫妻の場合、しばらく「印籠」の出番はなさそうだ。

それにA家はご夫婦とA男さんの両親の4人で経営に当たっている。協定は4人で結ぶのが本来の形なのだが、「オヤジにいつても受け付けなかつた」ので、夫婦2人だけで結ぶことにしたそうだ。Aさんのお宅は本当にバリバリの家族経営で、4人の役割分担はしっかりとっている。それなのに「普及センターの人がすすめるから」実状と違った、形ばかりの協定を結ばざるを得なくなったようだ。

「書面上は4人で結んだことになっていて

も、調印式に若夫婦しか来ない家もたくさんありましたよ」(A男さん)

家族の役割について、外部の人間にとやかくいわれるだけでもうっとうしいのに、いい年をして卒業式みたいな調印式……なんか恥ずかしい。出席を拒否するじいちゃん、ばあちゃんの気持ちもわかる気がする。形ばかりの調印式に出席した人たちの中にも、「なんかへん」という気持ちはあるのだろう。ただどこれも「へん」とも「無意味」だともいわないらしい。その空気もへんじじゃないか？

●まだ「おしん」なの？

A子さんに聞いてみた。

「農家はタダ働きでしんどいと思ったことありますか？」

「……ないなあ。家族バラバラでなく、みんなで一緒にご飯が食べられるからいいなあって」

農家の女性はタダ働きで大変という話は、学生時代「女性史」のテキストなんかでさんさん読まされた記憶がある。苦しくても耐えて働んで頑張りぬく「おしん」をイメージしてしまうが、今だにそうなのだろうか？

少なくとも私が出会った人たちは、みんな誇りを持って家業に打ち込んでいるし、家族の輪を保つバランス感覚も備えた、優秀で魅力的な女性ばかりだ。農家の家族関係は急速に変化している。もし「小遣いが

少ない」とか「休みがほしい」といった問題が生じて、自力でなんとか乗り越えるだけの裁量を供えている。認識がかなりズレていないだろうか？

黄門様はテレビだけの存在になった21世紀。今さら「印籠」のご威光にすがろうという人はあるまい。

●普及員の存亡が…

それでも協定の調印は、全国的に急ピッチに進んでいる。農家自身が自主的に結ぶよりも、普及センターのすすめで「結ばされる」ケースの方が多いようだ。

経営に必要な家族間の取り決めを構成員が話し合うのは、大切なことだ。それなくして農家の経営は成り立たないから、普及員にいわれて初めて家族の経営を考えている農家なんて、今時珍しいのでは？ それなのに躍起になって協定の締結を進めるのはなぜか？

「家族経営協定は、普及所の点数稼ぎの意味合いが濃いと思う」(Bさん)

普及員の中でも、かつてはカマドの改良近年では直売所のバックアップなどを担当している生活普及委員が、協定を担当するケースが多いという。

農家の生活に改良の余地がなくなってきた今、「家族経営協定」の普及は生活普及員に残された最後の砦といえるのかもしれない。存亡の危機に瀕した普及センターの事業に、農家が付き合わされている感はない。

めない。

それでも「協定を結んで本当によかった」(Dさん・60代)という声もある。彼女の場合、ある女性普及員との出会いによってインスパイアされ、自分の農業が大きく変わったという。聞けばその人は、手がけた加工所や直売所がごとごとくヒットする、プロモーターのような「カリスマ普及員」で、家族経営協定もその人のすすめで結んだところ、夫婦の経営のあり方をとことん考える契機となり、以前よりさらに発展的な経営観を持てるようになったそう。外部の人間が夫婦の問題に立ち入るからには、ここまで到達できなければ意味がないだろう。

農家に限らず、家族のあり方や運営に行き詰まったり困ったとき、触発されて新相談したり話し合うことで、触発されて新たな展望が見えてくることもある。だけどその相手は必ずしも普及員とは限らない。むしろこれから農家の経営をインスパイアしていくのは、農家同士だったり、異業種の人間なのではないか？

●ヤンジャンズ(ヤン)！

これからも「なんとなく」結ばれて、そのまま押し入れの奥にしまい込まれる協定書が、ズンズン増えていくのだろうか？ なんだか時間と手間と予算がもったいないなあ。そのお金でうちにベビシッターを派遣してくれないかしらん？ あっ、農家

じゃないからダメ？ それならせめて今の農業女性の実態にマッチした形で使ってほしい。例えば非農家出身で農業を志している20代の女性が、「誰も農地を貸してくれない」と困っているケースを見た。これこそ「農村女性のキャリアアップ」に貢献する事業ではないか。可能性のある新しい人材にも目を向けるべきだ。

Aさんと机の上のペラペラとした協定書をしげしげと眺めつつ話した。

「私は子どもを抱えて、目の前の仕事を上げるのに精一杯だなあ」(三好)

「私ら子どもを育てなきゃいけないし、田んぼや畑は待っているし、協定云々より、本当にやらなきゃいけないことが、いっぱいあるもの」(Aさん)

私の周りには、突然職場が倒産したり、リストラの不安にさいなまれながら派遣の仕事が続いているお母さんもいる。今真剣に協定を必要としているのは、企業に雇用されている女性の方だと思う。農家の場合、解雇されることはまずないし、突然職場がなくなる心配もない。この不況下、「やることがいっぱいある」のは、大変だけれどあわせなことなんじゃないだろうか？ 自営業は強いゾ！

農家はいつまでも「特別」じゃない。お役所にいわれなくても大丈夫。家族や仕事のことは、自力でケリをつけるから、ほっといてほしい。

(続く)